病院薬剤師のための情報誌　リリー ファーマ アカデミー
vol.1　2014.秋

Lilly Pharma Academy

Lilly Pharma Academy Virtual symposium

2014年10月15日に今後変化していくことが予想される「病院薬剤部の将来像」をテーマにWEB講演会が行われました。新たな社会的ニーズに病院薬剤部としてどのように対応していくのか、講演をレポートします。

講演1
当院における病棟薬剤師業務とチーム医療の実際

医療法人社団愛友会　上尾中央総合病院薬剤部長　増田 裕一 先生

講演2
“求められること”は変わる!! だから、現在だけでなく3年先も見る

山口大学大学院医学系研究科医学部附属病院　薬剤部長／臨床研究センター長　古川 裕之 先生

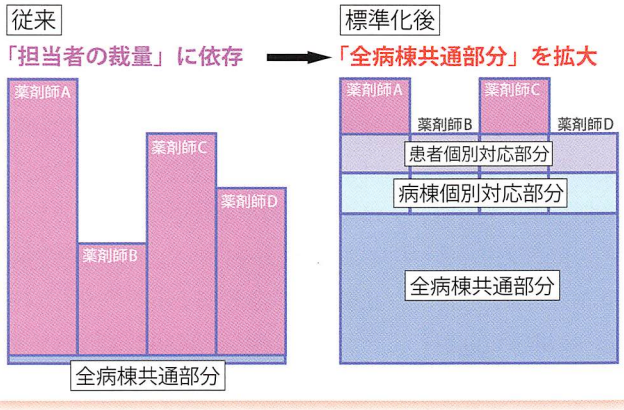
薬剤師の医療安全に関わる責務はきわめて重要

講演1では、増田裕一先生が上尾中央総合病院薬剤部での病棟業務取り組みと今後の展望について語った。増田先生によれば、医療安全に関わる薬剤師の責務はきわめて重要である。安全な医療を推進するために、さまざまな場面で薬剤師の専門性が必要とされ、たとえば、処方疑義を減らして患者さんの不利益を回避するためには薬剤師と医師が相談して処方内容を決めていくことが大切。

同薬剤部では薬剤師が薬物療法に直接関与し、薬学的患者ケアを実践して患者の不利益を回避ないし軽減した事例をプレアボイド報告書として日本病院薬剤師会に提出。2012年からはプレアボイド報告件数の目標数を専任病棟薬剤師が申告し、その目標を達成するよう努めている。

近年、薬剤部では処方オーダー入力、検査オーダー入力、PCAポンプの設定、近隣調剤薬局への「外来がん治療認定薬剤師」取得に向けた勉強会開催、抗がん剤に関する薬剤師の説明・同意書の聴取などに取り組んでいるが、先生は「収益以上にその必要性を患者さんや病院に認めさせることができる業務は必ず保険点数でも認められるという信念をもってほしい。これからの病院薬剤師は患者さんのニーズをいち早く察知し、成果を社会に示していかなければならない」と語った。

図1 業務の標準化



新時代の薬剤師に求められる先見性

さまざまな場面で病院薬剤師の専門性が高く評価され業務も拡大してきているが、古川裕之先生によれば、薬剤師の仕事の変化の兆しは3年前から見え隠れしている。

先生は「新時代の薬剤師に求められることは目の前の課題を解決すること、新しい課題を自主的に設定できること、問題提起

（☜裏表紙に続く）

（表紙からの続き）
だけでなく解決策を提案できること、臨床上の課題を科学的に解決できること」だとし、そのために何ができるかが重要と語った。

古川先生の経験によれば、たとえば10人の薬剤師を対象に1つの提案をすると、賛同するのが1人、反対するのも1人、あとの8人は賛成でも反対でもないという立場。全員の考え方を一致させるためには全員を同じ立場にすることが必要。そこで山口大学医学部附属病院薬剤部では全員が病棟業務を担当し、従来のセントラル業務も担当するようにした（図1）。

また、薬剤師が新しい業務を進めるためには、説明資料を工夫して医療チームや病院管理部に説得力あるプレゼンテーションすることが必要だという。納得してもらい実現できたら、その成果・実績を目に見える形で示す。また、薬剤師と医師では薬に対するアプローチが異なる。医師は作用の強さ、効果をみるが、薬剤師は安全な医療という観点から薬のマイナス面（副作用）に注目する。だとすれば両者が互いの専門性を認め合うことでよりよい医療が実現できる。古川先生は「トンネルを抜けても花畑が待っているわけではない。次もトンネルかもしれないが、薬剤師はその先にあるもの、つまり3年先を見て仕事をすることが大切だと講演を締めくくった。

ディスカッション

病院薬剤師の役割はますます重要になる

山口大学大学院医学系研究科医学部附属病院　薬剤部長／臨床研究センター長　古川 裕之 先生

医療法人社団愛友会　上尾中央総合病院薬剤部長　増田 裕一 先生

副作用から患者さんを守る薬剤師の使命とは

―副作用の軽減や回避についてどのような取り組みをされていますか。

増田　病棟でできるだけ早く患者さんから情報収集し、病態の異なる1人1人の患者さんに対して最も適切な薬剤を選択することが重要です。

古川　薬剤師が患者さんに感謝されるのは薬の副作用から患者さんを守ったときです。そこで私たちが取り組んでいるのが、予想される重大な副作用の早期検出（RMPへの関与）と未知の副作用の早期検出です。前者は2014年10月からトライアルを開始し、後者は副作用のシグナルを確認する作業をすでに始めています。

―高齢者に対する副作用対策についてはいかがですか。

増田　患者さんを前にしたとき医師だけでなく薬剤師もついて予想される副作用であれば回避できる薬剤を選ぶ。患者さんにも十分に説明して納得してもらうことが大切です。

古川　不要な薬を減らす工夫が必要です。高齢者は副作用もでやすいので早期に検出できるよう経過を観察しています。

古川 裕之 先生

機能分化・連携の進展と今後の薬剤師のあり方

―今後病院の機能分化と連携が加速すると思われますが、薬剤師の業務も変化するとお考えですか。

増田　今後、在宅療養される患者さんが増えてくることが予想されますが、開業医の先生や調剤薬局との連携を密にすることが必要です。退院すると服薬アドヒアランスが低下する例もみられるのでそこにも私たち薬剤師が介入していく必要があると思います。

古川　増田先生が言われたように地域の病院との連携をどういう形でつくっていくかが重要です。当院でも来年の4月に向けて地域連携の取り組みについて検討しています。

増田 裕一 先生

新たな社会的ニーズに薬剤師がどのように対応していくか

―今度は古川先生から社会的ニーズに薬剤師がどう対応していくべきか。お考えをお聞かせください。

古川　患者さんがこうしてほしいと思っているニーズと薬剤師が掘り起こすニーズがあります。こんなこともしてくれるのか、という新たなニーズを掘り起こしてそれに対処していくことが必要ですね。基本は副作用から患者さんを守ることです。そこさえブレなければ医師も看護師も安心して仕事ができると思います。

増田　薬剤師が病棟にいるから安全な薬の使い方がなされているという認識になりつつあります。抗生剤が術中だけに限られるようになったり、そういう成果を見せていくことが大切です。

―短い時間でしたが、今日はどうもありがとうございました。

バーチャルシンポジウムの詳細は、右記URLにアクセスしてご覧ください。 http://www.m3.com/kobe/pvs/

※ コンテンツをご覧いただくにはm3.comおよび日本イーライリリーのMR君への登録が必要です。未登録の方は画面に従って登録をお願いいたします。

病院薬剤師の将来像

第2回：病院薬剤師による薬物治療への積極的参加

Lilly Pharma Academy Virtual Symposium 2014

薬剤師法第1条では、薬剤師の職務は「調剤、医薬品の供給その他、薬事衛生をつかさどる」と規定されており、具体的には、処方の適切性の確認、薬剤の有効性・安全性の情報提供、そして服薬指導などを包括したものと考えます。
2010年の厚生労働省医政局長通知において、薬剤師が薬剤の専門家として主体的に薬物療法に参加することが推奨されるようになりました。さらに2012年には、薬剤師による病棟薬剤業務実施加算が示され、病院薬剤師に期待される業務は大きく変わりつつあります。これは本来薬剤師の職務として法律に規定された仕事に、全面的に取り組むためのチャンスと考え、以来、その実現に取り組んできました。

出演・監修：山口大学大学院医学系研究科 教授
医学部附属病院 薬剤部長　古川 裕之 先生

薬剤師による病棟業務の標準化

私は2010年9月の現職着任と同時に、病棟業務推進のための作業に着手しました。最初の仕事は、目的と作業内容の明確化です。薬剤師が病棟で行う仕事には診療報酬が付与されるため、業務内容は診療報酬において明示されています。それを基に、病棟業務の内容と遂行するために必要とされる人数を明確にすることで、病院全体から体制づくりのための支援を得てきました。

実際に全病棟へ薬剤師を配置する際に問題となったのは、病棟業務内容に個人差があることでした。そこで個人の裁量を極力減らし、業務の質を均一化することを目指して、入院から退院までの病棟業務を整理しました（図表1）。そして2011年4月、まずは内科系病棟をモデル病棟として病棟業務を開始しました。

その後、2013年4月に全病棟への薬剤師配置を実現しました。その際、モデル病棟での経験をベースに「病棟業務標準手順書」を作成し、病棟薬剤師全員に配布しました。病棟薬剤師がこの手順書に基づいて各業務を行うことで、薬剤業務の質を確保することを可能にしました。この他にも、副作用シグナル確認シートや、注射薬混合時のトラブル報告シートなど、病棟業務をサポートし標準化するためのさまざまなツールを作成し、使用しています。そして、2014年9月、「病院薬剤業務実施加算」算定を開始しました。

>> 次ページ　薬剤師の薬物治療への積極的参加がもたらす変化

1 2 3 ▶

Lilly Copyright© Eli Lilly Japan K.K. All rights reserved.　Produced by M3, Inc.

病院薬剤師の将来像

第2回：病院薬剤師による薬物治療への積極的参加

Lilly Pharma Academy Virtual Symposium 2014

薬剤師の薬物治療への積極的参加がもたらす変化

病棟業務の取り組みにおける最大の変化は、院内の薬剤師数の増加です。当院では、2年間で17人増員しました。おそらくほとんどの大学病院で薬剤師は増員してきていると思います。そして現在は、調剤などのセントラル業務に専任者は置かず、全薬剤師が週20時間の病棟業務とセントラル業務を分担するようになっています。

また、病院における薬剤師の活躍が期待されるようになったことで、求められるスキルも変化しています。厚生労働省が推奨する薬剤師業務の1つとして、調剤スキルの向上が挙げられています。当院においても、以前は4人で抗がん剤の調製にあたっていましたが、業務量の増加に伴い、約1年で習得できるカリキュラムを作ってスキル養成に取り組んでいます。

地域差はあるものの、病院における医師不足が進んでいる現状では、薬剤師が持っている知識や技術を生かして薬物治療に積極的に関与することで、医療の質向上および患者の安全確保に加え、医師の負担軽減が可能になると考えています。

>> 次ページ　安全な治療のため、薬剤師ができること

◀ 1 2 3 ▶

Lilly Copyright© Eli Lilly Japan K.K. All rights reserved.

Produced by M3, Inc.

病院薬剤師の将来像

第2回：病院薬剤師による薬物治療への積極的参加

Lilly Pharma Academy Virtual Symposium 2014

今後の課題と展望 ～安全な治療のため、薬剤師ができること～

医師と薬剤師の役割を考えるとき、安全面をみていくのが薬剤師だと考えています。副作用を早期に検出することはもちろんですが、副作用モニタリングのための検査や血中濃度測定のタイミングは、薬剤師がコントロールすべきだと考えます。患者さんを副作用から守る役割を薬剤師が担うことで、患者さんが安全な薬物治療を受けることができ、信頼を培うことにも繋がると思っています。

また、こうした薬剤師の病棟業務のさらなる効率化・発展を目指して、新薬のリスクを簡潔に纏めて一覧表示するソフトの作成や、在宅移行促進のための入退院センターの開設など、さまざまな取り組みを進めています。今後は、臨床現場で起きているクリニカルクエスチョンに対する科学的なアプローチなど、臨床的なニーズに応じた研究を進めることで、医療の進歩に貢献する活動に取り組んでいきたいと考えています。

◀ 1 2 3

Lilly Copyright© Eli Lilly Japan K.K. All rights reserved.

Produced by M3, Inc.